

付録資料『騎兵第三旅団の栄光と終末』（抜粋）

本資料は、元陸上自衛隊岩手駐屯地史料館勤務佐藤幸男氏提供の『騎兵第三旅団の栄光と終末』（第三旅団史編集委員会著 第三旅団史刊行会発行 昭和五十五年九月発行）からの抜粋である。本誌島田隆輔氏著「宮沢賢治文語詩稿の一側面」に取り上げられた文語詩「悍馬」読解の補助資料として照会する。明治以降の軍事史を知る資料である。

序文は、田中角栄が寄せており、それによれば、田中は昭和十四年三月「徵集兵として同旅団騎兵第二十四連隊第一中隊に入隊した」とのことである。

「旅団本部と第二十三連隊は宝清にあり、第二十四連隊は富錦に駐屯し、その分遣隊が同江に駐屯していた。春とは名のみ、北満州の大地は凍りついていてガチガチと音がしていた。国境守備隊の任務は重く厳しいものであつたが、なつかしい思い出ばかりが残つている。」と述べている。賢治の童話「北方將軍」の話が思い出される。

「第一編 旅団創設から渡満までの概要 第一章 創設と本土駐屯時代」によれば、騎兵の創設は明治四年、第一次世界大戦敗戦により昭和二十年に廃止されるまで続いた。その歴史は、次のようにまとめられている。

- 一、創設混沌期(健軍より日清戦争まで)
- 二、初期試練期(日清戦争)
- 三、拡大整備期(日清～日露戦争間)
- 四、真価宣揚期(日露戦争)
- 五、飛躍伸展期(日露戦争後～大正前期)
- 六、検討停滞期(大正後期～昭和前期)

【中略】

「騎兵第三旅団」は、「飛躍伸展期」の明治四十二年七月十日に、「軍騎兵(戦略騎兵)」の「任を負つて」、盛岡市に発足したという。「騎兵第三旅団の營舎は盛岡市の西北「下厨川」に建設されたが、前は「觀武ヶ原」練兵場、更に

北方には広大な『一本木原』の演習場を控え、訓練には好適の地であった」とある。

明治四十二年七月一日、近衛騎兵連隊から編入する六十名が、七日までに全国から編入要員が盛岡に到着し、盛岡市は「一躍軍都となり、異常に興奮に包まれた。」という。また、騎兵旅団の創設に伴つて、近郊農村から食料を納入することになり、「県の産業振興に貢献するところ極めて大きいものがあった。特に軍馬購買があり、高値で買い上げられた」という。

その後、岩手県内は、騎兵訓練のための演習場となつた。

観武ヶ原練兵場より一本木原演習場間は、農商務省の種畜場、並びに育成牧場となつており、起伏の多い地形であつた。一本木原演習場は広大な平坦地を形成しており、場所によつては赤松林地帯があるなど、好個の演習場であつた。また「松川」と称される地域には、豊富な湧水泉があり、野営などの場合はこの松川付近が選定されたものであつた。

その演習の模様について、次のような挿話を紹介している。

ところで、旅団創設の年、即ち明治四十二年十月六日より一週間、この「後藤野」で旅団の秋季演習が実施された。その時、初めての騎兵演習

と云ふことで、近郷近在より数千の参観人が演習場付近に詰め掛けた。そして物珍しさからか、この参観人が行動中の部隊と共に動き出し、演習の妨害ともなりかねない状況となつたのである。そこで急遽花巻警察署員の外、周辺町村の当時の消防組が総出で整理にあたり、漸く演習再

開となつたという挿話もあつた。

その後、岩手県内で記念すべき大きな演習が行われたのは昭和三年十月のことである。東北では十数年ぶりの「大元帥陛下」を迎えての「特別大演習」であつたといふ。この演習に先立ち、九月二十七日から十月三日にいたる一週間、騎兵集団の「特別騎兵演習」が、一本木原で実施され、それに引き続いで、「特別大演習」が十月四日から八日まで、岩手平野を中心に行われたといふ。その模様は、次のように詳細に述べられている。

南北両軍主力は、秋田・山形間で交戦中にして、南軍第二師団(飛行隊配属)は北上川河孟に策動すべき任務を受け、横手付近から横黒線(現北上線沿いに黒沢尻現北上市付近に進出を企図す。これに対して北軍第八師団は、自動車輸送により沼宮内付近に兵力を集結中なり。

また、北軍騎兵集団は、敵の黒沢尻付近の隘路進出に乗じてこれを各個に撃破するに決し、十月六日早朝、盛岡を出発した。

騎兵集団は、特に敵機に対し企図を秘匿しつつ、奥羽山系東麓の疎林地帯を利用しながら南進した。そして、まず石鳥谷—六原付近の敵先遣隊を奇襲殲滅し、更に進んで黒沢尻西方の隘路口に敵本隊を急襲し、多大の戦果を挙げたが、演習指導上は「北軍利あらず」ということで、騎兵集団は敵の前進を停滞せしめつつ盛岡付近に後退し、後図を策することに決し、観武ヶ原付近に兵力を集結することになったのであつた。

十月七日、北軍第八師団は観武ヶ原北側に陣地を占領し、南軍第二師団と相対峙す。騎兵集団は、夜陰に乘じて企図を秘匿しつつ遠く岩手山麓を小岩井農場方面に迂回転進し、黎明を期して敵の左側背を奇襲殲滅することに決した。諸隊は、沛然と降る雨の暗夜、泥濘馬膝を没する悪路の迂回行動に成功したのであつた。

翌八日、観武ヶ原における南北両軍の決戦では、陛下の御前で森寿少将の指揮する騎兵第三旅団の乗馬襲撃は、凄惨・壮烈恰も彼のブレッド旅団の再現を思わしむるものがあり、驚異的な大戦果を挙げて演習終了となつた。

【中略】

この演習においては、現在の岩手大学農学部内において天皇による講評がなされ、騎兵第三旅団長森少将には格別の評価がなされたといふ。また、この「特別大演習」の「大本営」は盛岡市内丸の県公会堂に設置され、天皇の随員として、田中(義)総理をはじめ、陸・海軍大臣、軍司令官等同行し、盛岡市内は「空前絶後の盛観を呈した」とある。

この演習は、騎兵旅団のその後の存廃問題に対して、大きな力を發揮したといふ。

ところで、これより先、大正末期より昭和初期にかけ、飛行機と火器の発達に伴い、騎兵廃止論が高まり、議論が沸騰した。その理由とするところは、

イ、国軍は飛行機の増強が急務である。そしてそれには、莫大な国費を必要とする。
ロ、主たる敵情搜索は、飛行機で出来る。

ハ、火器の発達に伴い、騎兵独特の乗馬戦は不向きとなつた。

ニ、以上の理由により騎兵を廃止し、その経費を飛行機に充当すべきである。

というものであつた。

これに対する騎兵存続論には、「騎兵はその特性を發揮し、敵の意表に出て奇襲、急襲により多大の戦果を挙げ、友軍戦勝の基をひらくため必須の兵種である」という反論が挙げられている。

つまり、この「特別大演習」は、騎兵第三旅団としては、軍馬の産地の地元での演習でもあり、騎兵の存続を賭けた譲れない演習であったといえる。

このような騎兵存続論をかけて行われたのが、この岩手県における特別大演習であつたということである。しかもその主役に騎兵第三旅団が選ばれたことは、旅団の栄光というべきであつた。

正に旅団の面目にかけても、対抗軍には絶対負けられぬという気迫は、悲壯なまでに浸透した。

以上のように、昭和初期に、軍馬の産地としては見過せない時代の動きがあつたといえる。文語詩「悍馬」の背景として重要ななかろうか。